

次世代放送規格に世界は動く

世界各国の地上デジタル放送開始から15年以上が過ぎ、次世代の放送方式が本格的に検討されている。これまでの方式は、日本のISDB-Tが17カ国、欧州のDVB-T/T2が72カ国、米のATSCが4カ国であったが、日本方式を採用する南米にATSC3.0が攻勢をかけている。

また、ATSCもDVBも次世代方式がIPベースで進んでいることもあって、6月17日に開催されたIEEE国際シンポジウムでDVB技術責任者とATSCプレジデントが対談し、「実りあるコラボレーションの機会を幅広い議論を行う」ことを表明している。

日本のデジタル時代の放送制度作りが必要な議論は何か。少しずつだが見えてきたのではないかと。 

半世紀を超える映像制作機器メーカー 朋栄

社長として考える 「技術の変化と メーカーの役割」



株式会社朋栄 代表取締役社長・清原克明氏

放送などの映像制作機器の専業メーカーである株式会社朋栄は、1971年に故・清原慶三氏が創業、テレビ画面に時刻表示するビデオタイマVTG-32を製品一号機としてスタートした。創業者の後を継いだ清原克明氏は、代表取締役社長と

してNAB Show 2022会場のブースに「Find Your Next Innovation」をテーマに掲げた。放送業界に揺るぎない信頼を確立している朋栄グループのリーダーとして、NABが発したメッセージをどうつかんだかを聞いた。

(文:吉井 勇・本誌編集部、写真:古山智恵・本誌編集部)

「米国市場の提案を礎に世界市場の信頼を」

朋栄はNAB会場のLVCCセントラルホールに毎年、同じ場所にブースを構える。今回も時間の許す限りブースに立った清原氏は、「来場者はリアル開催の前回(2019年)の半分でしたが、今までにない手応えを感じました。重要顧客である中南米のお客様ともじっくりと話す時間が持てました」と話す。

もちろん、最大の市場となる米国へのさらなるアプローチも強く意識している。

「米国は映像コンテンツの制作市場として最大です。経済規模はもちろん、技術とビジネスの先進性にあふれていますので、ここで通用する提案を用意していくことは、世界の市場から信頼を得ることもつながると考えています」(清原氏)

「ベースバンド、ファイルベース、グラフィックス、IPの技術をバランスよく」

本誌が朋栄に注目したのは、2007年発表のファイルベースによる統合管理システム「MediaConcierge」である。当時、MXFによる放送ワークフローの変革が動き出し、本誌も別冊『The FileBase Book』を2009年に刊行している。

3年ぶりのNAB Showに、どういった提案で臨んだのか。

「IPとSDIの2つを活用したいという要望を中南米の放送局からいただいています。この要望は、2016年から12G-SDIとVideo over IPに取り組み、ベースバンド、ファイルベース、グラフィックス、IPの技術にバランスよく対応するという方針を持つ弊社の考えと一致しています」(清原氏)

ブースで関心を集めた技術に12G-SDIがあった。これも2015年から開発を進めてきたものだ。「データ量の大きさや伝送距離、高周波の扱いに開発陣は苦戦しましたが、勘所が分かってきたようで、着実に次のステージへ進んでいます」と開発陣への信頼を語るように、SDI最高レベルの12G-SDI伝送をクリアしたのである。